

第三者意見



明治大学国際日本学部
学部長・教授
鈴木 賢志氏

東京大学、英国ロンドン大学を経て英國ウォーリック大学政治・国際研究科博士課程修了。
専門分野は政治経済学。一般社団法人スウェーデン社会研究所代表理事・所長。

現在は、社会・経済の環境変化が国の社会システムをどう変化させ、
企業や人間の心理・行動にどのような影響を与えるかを研究課題としている。
スウェーデンで約10年間、教育・研究に携わった経験を持つ。

本年度の報告書を開くと、国連が示している「持続可能な開発目標」の17のマークがまず目に飛び込んできました。「持続可能な開発(Sustainable Development)」という考え方とは、1992年の国連環境開発会議(地球サミット)で広まり、今や子どもでも知っています。しかし「言うは易く行うは難し」で、16年経った今でも、世界がなかなかそのような方向に舵を切っていないというのも、また事実です。

ところで、そもそも「持続可能な開発」とは何を意味するのでしょうか。この概念の端緒と言われる「環境と開発に関する世界委員会」(ブルントラント委員会)が1987年に発表した「Our Common Future」という報告書には「人間には、将来世代が必要を満たす力を損なうことなく、現在の需要を満たすことを保証する形で、開発を持続可能にする力がある」という記述があります。これは言いかえれば、目先の利益を追求することは大切だけれども、それが将来の可能性を犠牲にする形で行われてはならないということです。

先に述べたように、これを実現させていくのは非常に難しいことですが、御社がその実現を企業の社会的責任として捉え、これまで行ってきたさまざまな活動をその枠組みに位置づけていくことを明確にしたのは、とても良いことだと思います。

さらに報告書では、CSRを構成する項目ごとに、それぞれが「持続可能な開発目標」のどの目標に該当するのかを示しています。これは各項目において御社がいかなる姿勢で臨んでいるかを知る上でとても良いことです。たとえば「ガバナンス」の項目では「人や国の不平等をなくそう」「平和と公正をすべての人に」の目標が該当するとされています。国連はその性格上、国や社会を念頭に置いて議論を進めているので、1つの企業に当てはめるには無理があるようにも見えますが、企業は社会の一部であり、そこで働く人々にとっては、それが人生の大きな部分を占めていることは間違ありません。したがってその企業の運営方法=ガバナンスの構築において、平等、平和、公正を意識することはとても大切なことです。本報告書でそのことを明示することで、私のような第三者が御社の

理解を深めると同時に、おそらくは御社で働いている方々においても、自分が所属する組織がいかなる方針によって運営されているのかを確認することができて、良いことであると思います。

ところで「社会」の項目において、今年から新たに外国籍従業員の採用・活躍推進について、従業員の研修やデータの公開を始めたことが目を引きました。私自身に長く海外で働いた経験があり、また現在、大学の教員として毎年100人以上の留学生と接していますので、日本の企業がいかに文化的に閉鎖的かということを知る場面が多々あります。データに示されているように、御社においては外国籍の従業員はまだ少数ですが、これからその数が増えることは間違いません。その時に重要なのは、実は入社してくる方々よりも、それを受け入れる側の方々の教育です。それは単にTOEICで良い点を取れということではなく、異なる文化背景を持つ部下や同僚、あるいは上司と、どう接していくのか、そこからプラスの効果を生み出すためには何が必要かということを一人ひとりが考えなくてはなりません。まずは日本に来たのだから、日本語を学べ、日本の文化を学べというのはわかりますが、単純に「郷にいては郷に従え」を押し付けているのでは、トップメッセージに掲げられている「一人ひとり異なるパーソナリティがお互いに啓蒙しあうことにより生まれる新しい発想」を得ることはできません。この問題は御社に限らず、日本企業が全体として抱えているものですが、もはやそこから目を背けることが出来なくなっているという現実をしっかりと認識する必要があると思います。もちろんこのことは、女性、障がい者、シニアという、伝統的ないわゆる「男性モーレツ社員」のカテゴリーに属さない方々の力をいかに最大限引き出していくのか、という問題にも通じるものです。

そうはいっても「現状まだそれほどでもないから…」と思ってしまうのが人の性です。しかしそれは環境破壊と同様に、現在の問題を将来世代に受け回すことと何ら変わりません。本報告書で「持続可能な開発目標」を明示するようになったことで、こうした意識改革が一層進むよう、期待しています。